令和6年度　道徳教育地域支援事業における事業内容

学校名［　庄内町立余目第二小学校　］

【研究の要約】
　研究テーマに「ともによりよい生き方を目指す子どもの育成」を掲げ、「伝え合いの質の向上」を意識した道徳科の主体的・対話的で深い学びと他の教育活動を関連付けながら、教育活動全体で児童の「ともによりよい生き方をめざす力」特に、本校の課題の一つである「思いやりをもってかかわり、行動する力」の育成をめざした。
　その結果、授業では、児童の伝え合いの意欲や質の高まりが見られるようになり、日常生活の中では、児童の道徳性の高まりを教員や保護者が実感できるようになってきた。

１．　事業の内容（具体的実践事例）

（１）外部講師を招聘して校内授業研究会及び庄内地域の小中学校教職員を対象とした研修会を実施し、「伝え合いの質の向上」につながる指導のあり方について学び合うことで、本校及び各校における道徳教育の推進につながるようにした。

・日時　令和６年１２月１１日（水）９時００分～１６時３０分
・講師　筑波大学附属小学校教諭　加藤宣行　氏
・内容　①校内授業研究会
　　第２学年　親切、思いやり『ぐみの木と小鳥』
　　②道徳教育地域支援事業研修会
　　＜示範授業＞　第５学年　相互理解・寛容『ブランコ乗りとピエロ』
　　＜講　　演＞　「子どもたちが深く考え、議論する道徳授業の要点」

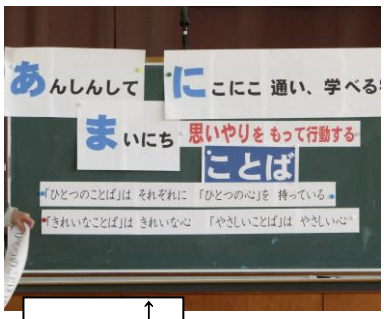
（２）本校の教職員３名が県内外の道徳科の授業研究会に参加し、研究会で得たものを校内で共有し、学び合いを重ねることで、指導力の向上が図られるようにした。
　話し合いのキーワードとなったのは、「この一点に迫る発問を考える」「道徳科の授業におけるＩＣＴの効果的な活用」「道徳を要としたカリキュラムマネジメント」の３点。

（３）学校運営協議会やＰＴＡの諸会議、学校だより等を通じて、「思いやりをもってかかわり、行動する子ども」を育むために、年間を通して「異学年交流活動」を本校教育活動の柱としていくことを家庭・地域と共有した。その上で、親子運動会やウォークラリー、なわとび大会、６年生を送る会等が、児童の道徳的実践の場となるよう、それらの持ち方を見直し、課題解決につながるようにした。

２．　研究成果（〇）と課題（●）

〇道徳の時間と他の教育活動全体を関連させた重点的取組により児童の道徳性を意図的・計画的に育成する見通しを持つことができた。
〇課題を自分事としてとらえさせる手立てや、伝え合いの質を高める教師のかかわり等についての理解が深まり、道徳授業の質的転換に向けた教職員の意欲が向上した。
●「より深く考え、議論する道徳」にするためのより多様な授業方法の工夫・改善
●「別葉」を生かした学校教育全体、家庭・地域とも連携を図った道徳教育の推進のあり方

＜参考資料＞

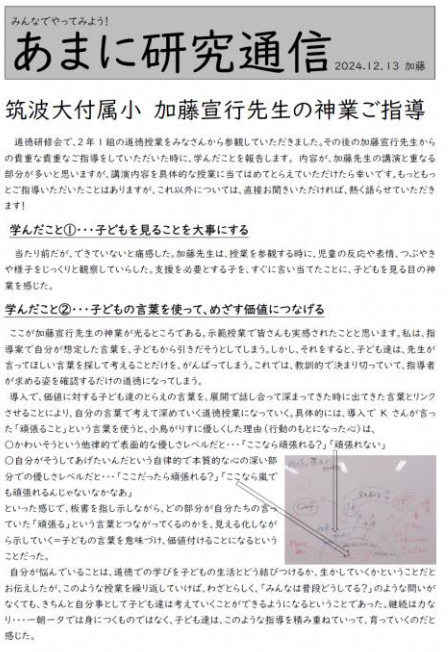


↑全校朝会の校長講話で重点課題を児童と共有。朝会後は、廊下に掲示し、意識できるようにした。

↑授業では、少人数でお互いの考えを伝え合う場面を意図的に取り入れた。

→道徳の時間の板書を写真に撮って教室の背面に掲示。いつでも振り返られるようにした。

→ご指導いただいたことは研究通信で共有。



みんなでやってみよう!

あまに研究通信 2024.12.13 加藤

筑波大付属小 加藤宣行先生の神業ご指導

道徳研修会で、2年1組の道徳授業をみなさんから参観していただきました。その後の加藤宣行先生からの貴重な貴重なご指導をしていただいた時に、学んだことを報告します。内容が、加藤先生の講演と重なる部分が多いと思いますが、講演内容を具体的な授業に当てはめてとらえていただけたら幸いです。もっともっとご指導いただいたことはありますが、これ以外については、直接お聞きいただければ、熱く語らせていただきます!

学んだこと①・・・子どもを見ることを大事にする

当たり前だが、できていないと痛感した。加藤先生は、授業を参観する時に、児童の反応や表情、つぶやきや様子をじっくりと観察していらした。支援を必要とする子を、すぐに言い当てたことに、子どもを見る目の神業を感じた。

学んだこと②・・・子どもの言葉を使って、めざす価値につなげる

ここが加藤宣行先生の神業が光るところである。示範授業で皆さんも実感されたことと思います。私は、指導案で自分が想定した言葉を、子どもから引きだそうとしてしまう。しかし、それをすると、子ども達は、先生が言ってほしい言葉を探して考えることだけを、がんばってしまう。これでは、教訓的で決まり切っていて、指導者が求める姿を確認するだけの道徳になってしまう。

導入で、価値に対する子ども達のとらえの言葉を、展開で話し合って深まってきた時に出てきた言葉とリンクさせることにより、自分の言葉で考えて深めていく道徳授業になっていく。具体的には、導入で K さんが言った「頑張ること」という言葉を使うと、小鳥が引すに優しくした理由（行動のもとになった心）は、

○かわいそうという他律的で表面的な優しさレベルだと・・・「ここなら頑張れる?」「頑張れない」

○自分がそうしてあげたいんだという自律的で本質的な心の深い部分での優しさレベルだと・・・「ここだったら頑張れる?」「ここなら風でも頑張れるんじゃないなかなあ」

といった感じで、板書を指し示しながら、どの部分が自分たちの言っていた「頑張る」という言葉とつながってくるのかを、見える化しながら示していく＝子どもの言葉を意味づけ、価値付けることになるということだった。

自分が悩んでいることは、道徳での学びを子どもの生活とどう結びつけるか、生かしていくかということだとお伝えしたが、このような授業を繰り返していけば、わざとらしく、「みんなは普段どうしてる?」のような問いがなくても、きちんと自分事として子ども達は考えていくことができるようになるということであった。継続はかなり・・・一朝一夕では身につくものではなく、子ども達は、このような指導を積み重ねていって、育っていくのだと感じた。

＜道徳性の高まり＞

【１２月実施　学校評価アンケートの結果から】肯定的評価の割合（%）

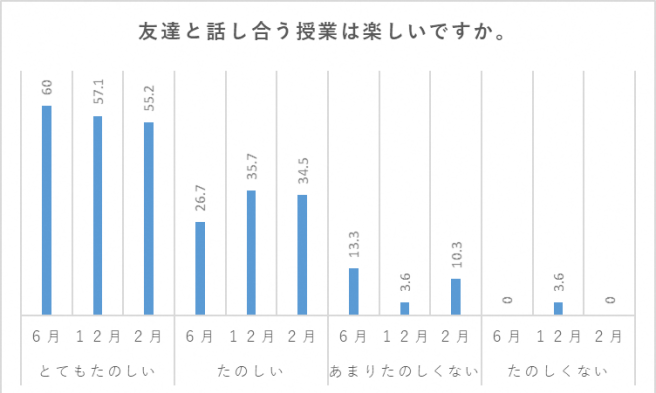
児　童：いろいろな友だちを思いやってやさしくしたり、協力したりしながら生活できた。⇒９４％

保護者：お子さんは、学校生活で人間関係を広げ、協調性や思いやりの心を育んでいる。　⇒９３％

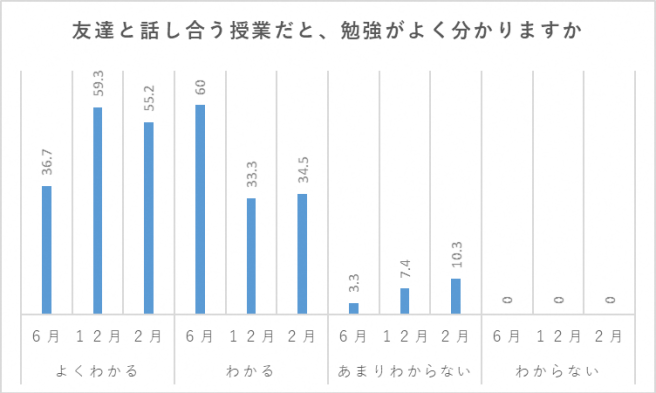
教職員：子どもたちは、学校生活で人間関係を広げ、協調性や思いやりの心を育んでいる。⇒９２％

＜伝え合いの質の高まり＞

【学校研究（道徳）アンケートの結果から　抽出２年生】　※数値は割合（%）



約９割の児童が話し合うことを楽しいと感じていることは、大きな成果である。授業では、６月頃には、なかなか話し合いに参加できなかった児童が、１２月には、生き生きと自分の考えを発表する姿も多く見られた。



２月に「あまりわからない」と回答した児童が１割とやや増えたが、肯定的評価をしている児童は９割おり、２年生なりに、友達との学び合いによる深まりを実感していることがうかがえた。